

《2012年2月 月例会報告》

【日時】2012年2月22日(水) 19:00～21:00(終了後は「ルン」予定)

【会場】筑波大学附属高校3F会議室 (東京都文京区大塚1-9-1)

【テーマ】アスリートのメディアサポートの現場から～Jクラブを事例に～

【情報提供者】片上千恵(メディアトレーナー)

【コーディネーター】仲澤眞(筑波大学体育系/サロン2002会員)

【参加者(会員)16名】安藤裕一(筑波大学ハンドボール部OB/医師)、牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会)、落合博(毎日新聞社)、菊地悟(株角川書店)、北原由(武蔵野北高校/青梅FC)、熊谷建志、古賀康彦(早稲田大学大学院スポーツ科学研究科/石神井高校サッカー部コーチ)、嶋崎雅規(帝京高校)、白井久明(弁護士)、白髭隆幸(国際スポーツプレス協会会員)、中川英治(クーバー・コーチング・ジャパン)、仲澤眞(筑波大学体育系)、中塚義実(筑波大学附属高校)、武藤豊(無職/元代表サポ)、森政憲(早稲田大学大学院スポーツ科学研究科)、依藤正次(ヨココム)

【参加者(未会員)14名】片上千恵(メディアトレーナー)、高橋正紀(岐阜経済大学スポーツ経営学科)、竹中茂雄(FC品川)、小林洋(日本スポーツプレス協会)、★白井弓人(武蔵大学社会学部メディア社会学科)、★中嶋信矢(日経BPアド・パートナーズ)、★田瀬六朗(NPO法人アミティエ・スポーツクラブ)、★岩村聡(筑波大学)、★増田有紗(筑波大学大学院)、★浅見綾香・★稲垣謙治郎・★嶋崎美江(筑波大学体育専門学群)、★杉原晋作(早稲田大学スポーツ科学部)、★菅又優太郎(順天堂大学大学院)

【報告書作成者】浅見綾香・嶋崎美江(筑波大学体育専門学群3年/未会員)

注1) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書はあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

注2) ★は初参加のため参加費無料。

アスリートのメディアサポートの現場から

～Jクラブを事例に～

片上千恵(メディアトレーナー)

<目次>

第I部 プレゼンテーション

1. はじめに
2. プレゼンテーションの背景
3. メディアトレーニングの概念と実践
4. メディアトレーニングの風景
5. インタビューのビデオから
6. メディアトレーニングの現状と課題

第II部 ディスカッション

1. 標準化から個別化へ
2. 学校教育とコミュニケーション
3. インタビューのタイプと主導権
4. メディア・リレーションズ
5. 多様化するメディアとその活用

第I部 プレゼンテーション

1. はじめに

本日はマレーシア戦が控えているなか、こんなに大勢の方々がお集まりいただけるとは思っておりませんでした。本当に驚いています。ありがたい機会をいただいたと思っております。ざっくりばらんな内容を持ってきましたが、後半のディスカッションでぜひ皆さんの意見を伺いたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

今日、駅のキオスクの見出しから思わず買ってしまったんですけども、ダルビッシュが日本のマスコミをとうとう「仕分け」するという内容が東スポの一面にありました。イチローや松坂選手の時にもありましたが大量に押しかけてくるマスコミに対して、要するにメディアパスの色で入場制限をしようという記事でした。ここで触れておきたいことは、日本のメディアというのは特定のスターを追いかけてワイドショー的に祭り上げてしまう傾向があるのではないかということです。ダルビッシュの事例は、球団と話し合ってメディア戦略を立てて、その結果こういう対策をとったということのようです。

2. プレゼンテーションの背景

私は筑波大学の仲澤先生のレジャー論研究室の卒業生です。その前は民放とNHK松山放送局あわせて11年、メディアでキャスターの仕事をしていました。取材者の経験を積む中で、もともとスポーツをしたかったのでスポーツの取材もメディアにおけるキャリアの後半で、運よく担当させていただきました。

そこでいろんな疑問、いろんなことを思うようになりました。たとえばインタビューに答えてくれて、「ありがとうございました少し延びちゃってごめんなさいね」って言ったすぐ後に、選手がいきなりアイシングを始めるとか…。言ってくれればインタビューの途中にしてくれてもよかったのに。メディアにすごく遠慮をしている選手ですとか、終わって「お疲れ様です」って言った後に話す雑談の中で面白い話があって、それを本番で言ってくれたらこちらはもっと大きく取り上げて、あなたの競技をプロモーションしてあげることができたのにと思ったり…。さらには、活躍している時だけ集中して、負けたらメディアが退いてしまう。それでメディアに対して懐疑心や敵対心を抱いてしまい、口を閉ざしてしまった選手…。などなど悲しい思いをすることも少なくありませんでした。

そこで疑問を抱くようになり、何かないだろうかと思っていたときに、メディアトレーナーという仕事がアメリカでは一般的にあることを知りました。それで、もう一度スポーツを一から勉強してみようということで大学院進学を決め、メディアトレーナーという今に至っています。

当時はまずは放送局をやめなきゃと思ったんです。メディアの人たちに教えられることに違和感を持つという人をたくさん見てきたので、まずは大好きだったキャスターの仕事をやめようと思いました。その頃、ちょうど朝日新聞の夕刊でこんな記事が出ました。ソルトレイクオリンピックの時に日本の選手にマイクを向けたら、今後の目標を教えてくださいという問いに対して「特にありません」という答えが返ってきた。これを向こうで(海外のメディアで)特別な望みはなにもないと訳されてしまっているというような記事でした。これで、メディアトレーナーというのは、私がメディアとスポーツ側を繋げる、自分の経験を活かせる仕事なのではないかと思い、目指すようになりました。

大学院ではメディアトレーニングの論文を書かせていただきました。その間にPR会社やスポーツマネジメント会社でインターンやアルバイトをしたのですが、社会人経験が十数年あったので即戦力として使っていただくことができました。IMGの高橋尚子選手が金メダルを獲るころにIMGでインターンさせていただいたりとか、Jリーグのクラブだとか。メディアトレーニングを調べると、元々は政界や経済界で発展したものなんです。PR会社で一般の企業のリスク対策ですとか危機管理の記者会見のメディアトレーニングですね。今も携わっていますが、こういった経験を積ませていただきました。でもやっぱりスポーツとは違う異なる部分が多く、自分なりにプログラムを開発し、今に至ります。

3. メディアトレーニングの概念と実践

スライド1

◎メディアトレーニングとは？

あらゆるステークホルダー（ファンはもちろんスポンサーやメディアを含む）に対して、選手や組織が理想とするメッセージを、メディアを通して効果的に伝えるための意識やインタビュースキル等の対応の仕方をするためのトレーニングである。

スライド2

◎メディアトレーニング実施対象

メディアトレーニングに興味を示しているところは、プロもしくは日本を代表するような、露出の機会が多くあるところに限られている。なかでもサッカーのクラブはいくつかあるが、最初は論文の調査がきっかけで、仲澤先生のご紹介により、2003年から柏レイソルで8年間、新人選手を主にトレーニングするなどのメディアトレーニングを行なった。

スライド3

◎メディアトレーニングの方法

①セミナー形式（研修）

1回90分～6時間程度でメディア対応やインタビュースキル全般について指導するもの。標準化レベルに上げることが目的。

対象：臨時に組織されたナショナルチームやチームの合宿・キャンプ時など。大勢が対象。

②コンサルティング形式

クラブや組織と年間で契約し、課題やゴールを明確に把握したうえで定期的にトレーニングを行なうもの

対象：Jリーグ、企業チームで実施。メーカー・マネジメント会社の個人も対象となる。

スライド4

◎メディアトレーニングの成果

- A) ロールモデルとしての自覚
- B) メディアの影響力の理解
- C) コミュニケーション・スキルの習得
- D) 危機管理意識の構築

A…トップアスリートとして自分の発言がどれだけ社会に影響を与えるか、メディアに対して影響力があるかを自覚する。

B…メディアにどんな種類があるか、どんな取材の仕方があるか、どんな取り上げられ方があるかを理解する。またメディアの仕組みを理解する。

C…イメージされやすいトレーニング。インタビュースキル、目線、姿勢、マイクの使い方、どんなコメントをするとメディア・イメージアップにとって効果的かを知り、習得する。

D…自分の発言一つで選手生命を脅かされる可能性があることを、様々な過去の事例を挙げて説明し危機管理意識を構築する。ブログ・SNSなどの第五のメディアに対する対策も行う。

これらを組み合わせてプログラムを構築していく。

スライド5

◎年間コンサルティング業務の内容

- ・選手向けメディアトレーニング
- ・フロントスタッフ向け広報研修…効果的な選手のメディア露出の仕方
- ・フロントスタッフ向けマナー研修
- ・クラブ幹部向け記者会見対応トレーニング…選手の移籍など
- ・クラブ幹部向けスピーチトレーニング…サポーターに向かっの会見
- ・テレビ出演事前トレーニング
- ・取材帯同
- ・地域貢献活動サポート

スライド6

◎メディアトレーニングによって個性が埋没する？

メディアトレーニングって個性が埋没してしまうんじゃないか？ 優等生的な発言を組み込んでいるだけでしょう？ とよく言われます。

標準化と個別化の方向性があると思うんです。標準化とは、新人選手でスポーツのメディアのこともプロのことともわかっていない選手たち、マイクを向けられたことのない選手たちが、ある程度のレベルまで、プロとしてふさわしい自覚を身に付けながら対応ができるようなレベルまで育てるものです。これはもしかしたら型を教えますが、その先はプロ選手として個性を尊重したアドバイスをしていかなければならないと、私はいつも意識して指導をしています。

一つ例があります。O選手。今ボルシアにいる選手ですね。今日のマレーシア戦には残念ながら出られないということですが、彼のブログでは、悔しいけれど理解はしているというようなコメントがあり安心しました。これはシリア戦のあとの週刊朝日の記事なんですが、要するに、これまでスポーツ選手は何を聞いても「そうですね」で始まっていました。これは気になる口癖の一つで、私も放送局時代、何回も編集で切りました。テレビメディアの嫌う口癖の一つなんですが、選手の一つのリズムとなっていて、完全な口癖の場合が多いです。ですが彼の場合はいきなり「あざす！」から始まったんです。新しいタイプの選手が出てきたと好意的にとらえられた記事でした。

ご存知の方が多いと思うのですが、彼は茶髪でいわゆるチャラ男というふうになんか代名詞がついていて、人気が出た選手です。実際のインタビューでも「ありがとうございます」とは言っていないんですが、記事では強調されて「あざす」と書かれています。彼らしさの出たインタビューでした。「あざす」で始まったことで、記事にも取り上げられましたし、もちろん彼のことでなく、ヒーローインタビューのあり方のようなものを論じているわけですけど、私は一年間、O選手の自由奔放さを生かした指導をしてきました。このインタビューが取り上げられたのは、その後のコメント内容が素晴らしかったからなんですね。象徴的に「あざす」と言ったあとに、試合の分析をし、次のマレーシア戦への豊富を述べ、みんなへの感謝を述べたまとまりのいいインタビューが聞かれました。

4. メディアトレーニングの風景（Jリーグ制作のビデオ）

昨年からは横浜F・マリノスを担当させてもらっています。Jリーグのキャリアサポートセンターが、マリノスでのメディアトレーニングの風景を映像にまとめてくださいますので、普段どんな風に行っているのかご覧いただけたらと思います。

<VTR>

バーバル・ノンバーバルの指導。スピーチ指導。

－選手感想－

- 思っている以上に表情が暗いことに気づきました。
- ロールプレイングを撮って見て、(自分の癖などが)見受けられたのでよかったです。
- 具体的なことが言えないので、そういうのを交えながらいえたらもっといいインタビューになると思いました。
- 自分は試合に出ることも多く、メディア対応も多い。挨拶面などよく言われることが多く毎回やっているのですが、すごく大事になってくるなと思います。
- 講義を受けてから、多くのインタビューを見るようにしている。スポーツ選手に限らず、ニュース等で政治や芸能を自然と見るようになってきた。サッカー選手のみでない対応した受け答えをいざという時使えるようになりたい。

この映像を編集した編集者のセンスもありますが、やっぱり、見た目の改善・口癖の改善など、スキルの部分の改善を求められる場合が多いんですね。ですがメディアトレーニングで一番重要なのは「マインドセット」の部分だと思います。松本翔選手がスポーツ以外のインタビューでもきちんとしたコメントが言えるようになりたいというようなことを言っていました。そのプロとしての自覚、自分が見られているんだ、発言に重みがあるんだということはこのトレーニングを通して自覚をしてもらえたら、目的が達成されたかなと言えると思います。

今日はほかの競技のアスリートの象徴的なインタビューをいくつか持ってきています。それを、なぜ私が特徴的だと取り上げているのか、また皆さんがどのようにそのインタビューをご覧になるかというのを、一緒にディスカッションしていただけたらと思って持ってきました。

5. インタビューのビデオから

◆1人目：槇野智章選手

(今季からレッズでプレーする。サンフレッチェ時代に柏レイソルに勝った際のヒーローインタビュー)

私はトレーニングでは、いつも試合後のヒーローインタビューをお見せするのですが、これが夜、「すぼると！」や「報道ステーション」で流れると、いいところだけ抜粋されて編集されてしまう傾向があるんですね。本当にその選手の生の声や口癖なんかを見ようと思ったら、やっぱり生のインタビューがいいと思います。

インタビュアー：場内のみなさん、先制のゴールを決めました、槇野選手です。本当にいいタイミング、いい時間帯に決めました。どういう気持ちですか。

槇野選手：チャンスは何回かあったんですけど、得意のセットプレーで決めることができてよかったです。

インタビュアー：今日はDFの面でも柏の早い攻撃を出させませんでした。どのように感じてのプレーだったんですか。

槇野選手：もう、うちのチームは、あの、攻撃が主にあれなチームなので、特に三列目からの攻撃参加を意識してやりました。

インタビュアー：長いドリブルも槇野選手自身ありましたね。

槇野選手：まあ、前半上げすぎて、後半疲れました。

インタビュアー：でも今日は4得点、J1で通算200勝を達成しましたし、ほんとうにこうなかなか最近勝てない中でこの勝ち点3、非常に大きいと思いますけど、いかがでしたか。

槇野選手：まあ、最近の試合の内容はよくても結果がついていかなかったんで、今日は内容も良く結果も付いて、

お客さんも喜んでくれたので、よかったですと思います。

インタビュアー：サポーターも1万1千人以上集まりましたし、槇野選手自身もこのあとに大きなはずみが付いたと思いますがいかがでしょうか。

槇野選手：まあ、もっともっといい結果残してビッグアーチが満員になるようにね、僕たちも頑張るので、お客さんも一緒に戦ってください。

片上：バーバル・ノンバーバル面でいつも標準的にとてもバランスのとれた、かつインパクトのあるコメントを残せると思っている選手です。

—参加者の感想—

A：笑顔がいいなと思いました

B：“そうですね”がある

C：一つひとつのワードが短い

片上：「そうですね」をいっぱい言っているのですが、それを気にさせない位のインパクトが他の部分であったと思います。「そうですね」はいろいろな選手に不必要に使わないよう指導していますが、それ以上にコメントの内容だとか、笑顔だとかがあったと思います。

「疲れました」と言っていたのは、パーソナリティーが出ていたし、使われやすいコメントを意識しているなと思いました。

おっしゃるとおり、ワードが短い。これは使われやすいですね。編集はしやすいです。うけもねらっていますね。このインタビューで見たいポイントとして、日本のスポーツ中継において、インタビュアーは最後に「最後にファンのみなさんにメッセージお願いします」と、必ずこう聞きます。そうするとき、「次も頑張ります。応援お願いします」が常套句のようにになっているんです。彼の場合は「一緒に戦ってください」。これでいいんですよね。しかも広島弁。しかもビッグアーチ。こういった効果もすごく大きいのではないかと思います。また、スタジアムのインタビューは、開放的で自然と大きな声は出るんですが、それにしても彼はいつも囲み取材であっても全員に聞こえるような大きな声で対応しています。

◆2人目：北島康介選手

(北京オリンピックの出場を決めた日本選手権でのインタビュー)

北島康介選手といえば「何も言えね」とか「超気持ちいい」で話題になりましたが、これは北京オリンピックの出場を決めた日本選手権のときの映像です。

インタビュアー：150までは世界記録を上回っていましたがどうでしたか。

北島選手：そうですね、100と同様みなさんの声援が聞こえたんですけど、あともうちょっとだったなあ。

インタビュアー：世界記録は北京の舞台で期待したいのですが、いまの意気込みを聞かせてください。

北島選手：もちろん北京オリンピックではセンターポールに日の丸を僕が上げたいと思っています。記録よりも勝負になると思うんですが、ここで日本記録を出せたことは今後の練習でいい勢いに乗っていけると思うので、勝てるようにやっていきたいと思っています。

—参加者の感想—

D：お客さんを盛り上げることを意識したコメントだ

片上：会場が盛り上がった瞬間分かりましたか？ わーっとなった瞬間のコメント覚えていらっしゃいますか？

「センターポールに日の丸を」という言葉だったのですが、実はこの時の日本水泳連盟のキャッチコピーで、彼オリジナルのコメントではなく、会場の横断幕に「センターポールに日の丸を」と書かれていたんですね。これをとっさのインタビューに入れ込める北島選手のセンスはすごいと思います。これによって水泳連盟大喜び、会場も盛り上がったのがお分かりいただけだと思います。次の日の新聞の見出しも「センターポールに日の丸を、北島北京決定」ですね。

「もうちょっとだったな～」というのも非常に彼らしい言葉ですね[何も言えねえ]も「超気持ちいい」もこれも、実は敬語も使えていない若者言葉なんです。しかし、一回だけの使用だからいいんです。タイミング良く持ってくる北島選手はうまいですね。

◆3 人目：大神雄子選手

(2年前のバスケット皇后杯で2連覇を果たした、当時JOMOのキャプテン)

インタビュアー：最後勝負どころでのシュート、しっかり決めていましたね。いかがですか。

大神選手：いやー、もう打たせてもらったシュートだったんで、最後出てる5人もそうですし、ベンチにいるみんなが打たせてくれたシュートだったんで、絶対決めたかったです。

インタビュアー：去年は久しぶりの優勝、今年連覇で、また違った思いがあるのではないかと思います。

大神選手：それで私、あの～、ここで余談になってしまうかもしれないんですけど、WBCの原監督の「連覇をすることがどれだけ難しいか」って言葉を自分自身が追求してきていて、その連覇をもらったチャンスがJOMOしかなかったんで、それを全員で統一し、ファンと一緒にそれに向かってやってこれた結果だと思います。

インタビュアー：骨折からの復活のシーズンだったと思いますが、まず一つタイトルが取れました。いかがですか。

大神選手：そうですね、あの怪我した時は本当にたくさんの人に支えてもらいましたし、自分としても結構試練だったんで、またこうやってコートに立てて、またみなさんの前でインタビューできてすごく嬉しいです。

インタビュアー：おめでとうございます。

大神選手：ありがとうございました。

片上：インタビューは100%支持されるものはありません。あの有森選手の名言「自分で自分を褒めたい」。あれに関しても、協会の一部から「自分とは何事だ」と。「協会への感謝が先だろ」と言われました。ただ、多くが支持するインタビューはあると思います。そのポイントを探して選手たちに伝えていく支援をしています。

さっきの北島選手のコメントに関しても、競技へのこだわり、アスリートとして、勝負師としてのコメントをメディアは絶対に聞きたいからマイクを向けているわけですね。北島選手のコメントは力強く、メディアやファンの期待に応えるポイントが詰まっていました。大神選手はどうでしょう？

—参加者の感想—

E：言葉がハキハキしていて聞き取りやすいですが、ノンバーバル面が気になりました。

片上：気になった方いらっしゃいますか？ ですが気にならなかった方、(挙手してもらって)60%くらいかと思いますが、それ以上に気になったところがあったのではないかと思います。インタビューってそうやってイメージが作られていくんですよ。コメントで印象的だったところありますか？

F：WBCの原監督のコメントを持っていきながらインタビュー前からメディアを意識しているのがわかりますし、広く視野を持とうとしているのがトップアスリートだなという印象を受けました。

片上：このコメントのところを気付いて欲しいなと思いました。エピソードを持ってくるということで、この夜の「サンデースポーツ」で、やはりその部分が編集で使われていますね。それとこのあとの怪我の部分も使われていました。日本のメディアは情・情けに持っていきのが大好きですので、涙をこらえながら語ったこの部分は使われていましたね。

原監督の「連覇」という言葉について、自分はずっと考えてきたというわけですが、その前に別の質問があったわけですね。それを「ここで余談なんですけど～」と言って主導権を握りました。どうしても言いたかったんだと思います。これがインタビューの主導権を握るということで、メディアトレーニングの目指すところです。

◆4 人目：森田佳寿選手

(帝京大学ラグビー部主将。大学選手権優勝インタビュー)

近年、学生のインタビューで大変完成された受け答えだったなと感心した映像をご覧ください。

インタビュアー：三連覇を成し遂げてどんな気持ちですか？

森田選手：去年1年間、ここをターゲットに積み重ねをしてきましたから、純粋に目標達成できたことに対して大きな喜びを感じています。まあそれと同時に、ここまで決して平坦な道ではなかったですから、いいことも辛いことも、その全部を乗り越えてこられたのは、応援に来てくださったみなさん、大学関係者の方々の素晴らしいご支援、そしてなにより、その全てを一緒に乗り越えてきた帝京大学ラグビー部の仲間がいたからです。本当にみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

インタビュアー：今日は後半はリードして入りましたが、なかなか点が取れず追いつかれました。どんな思いでプレーしていました？

森田選手：いやもう本当に天理大学が素晴らしいチームでしたから、試合は厳しいゲームになったんですけど、これまで積み重ねてきたことを信じていいチームワークを発揮しながらお互い支え合って頑張れました。

インタビュアー：最後は森田選手の足にかかりましたけど、その辺いかがだったでしょう。

森田選手：いやもう、これまでずっと練習してきて、僕がキャプテンとして最後決められたのでよかったです。

インタビュアー：ちょっと早い言い方かもしれませんが、これから先の日本ラグビー界はあなたたちの年代が支えていなくてはなりません。今後に向けてはどんな気持ちですか。

森田選手：そうですね、まずは目の前の1試合、目の前の1つの練習、そういったところに目を向けながら、自分たちの年代がしっかりと成長して行って、今のラグビー界を担えるようなそういう存在になっていきたいと思います。

—参加者の感想—

G：最後だけ「思います」って言葉だったんですけど、それまでのところは言い切る形で、すごい堂々とした印象を受けました

片上：日本語っていうのはとにかく動詞を変えると彩りが増すんですね。スピーチトレーニングの時によく申し上げるのですが、日本語の話し言葉は「思います」「考えます」「感じました」、こういったものでいつも締めてしまうんですね。彼の場合は語彙が非常に豊富だということがここでもわかります。なので、インタビューがパターン化していない。いろんな工夫をしたインタビューだな、飽きさせないインタビューだなと思います。

H：今までの中で一番素晴らしい、優れた人間性を感じさせるインタビューだったと思います。彼のインタビューには周りへの感謝、相手へのリスペクトなどがしっかりと含まれており、素晴らしい男だなと思いました。完成度が高くて、人間性を感じますよね。他にありますか？

I: 逆にまとまりすぎかな。日本のラグビー、それじゃダメなんだよって、分かってんのかよ、お前はって印象を受けました。

片上: まとまりすぎますよね。それを記事にしようとした時に、やっぱり大神選手のようなエピソードがあったりとか、北島選手のようにキャッチーなコメントがあったりするほうが記事にはなりやすいんですね。ただ全体的に帝京大学ラグビー部という部活の品格だとか、ラグビーやるとこんな風な選手が育つのかとか、イメージアップには大きく貢献していると感じました。これを天理大学のホッケー部出身選手たちに見せたとき、天理大学をものすごくリスペクトしてくれていて、応援したくなりましたと言っていました。その時に選手たちが面白いことを言っていたんですけど、多分あの人こうやってますよね（わき腹を抑えるポーズ）って言っていたんです。これはやはり威圧のポーズなんで、あまり好ましくないと思いますが、それを上回るコメント内容だったと思います。あと、ラグビーっていうのは、表彰式に至るまでに準備があって、臨場感のあるインタビューではないんですね。ずいぶん落ち着いてしまっていて声のトーンが低いんじゃないかっていう指摘もありました。

6. メディアトレーニングの現状と課題

スライド7

◎課題

①話し方教室?!

②インタビューの練習する暇があったらボール蹴ってる!

メディアトレーニングっていうと、「ああ、話し方教室でしょ」とイメージをされる方がまだいらっしゃいます。現役アナウンサーのような指導に重きを置く人もいらっしゃるのですが、私は一番重要なのは自覚を持ちかた、「マインドセット」の部分だと思いますね。メディアトレーニングの効果や目的に関して、正しい概念の一般化に理解を広めたいなと思っています。

「インタビューの練習する暇があったらボール蹴ってる!」

未だこういうコメントをする指導者の方はいらっしゃいます。インタビューの練習する暇があったらボールを蹴っている、またメディアトレーニングか、と。

これはインタビュー練習の効果を見せていかなければいけない。ただ選手の不用意な発言やメディアの報道の仕方によっては、その競技やクラブのダメージはもう何千万・何億円にものぼり、取り返しがつかないようなことにもなる。逆に考えると、ものすごい効果のあるものなんだということを、競技力との関連性をなにか効果測定していかなければいけないなと考えています。これは今後大学で研究者となった時の大きな課題の一つであります。

メディアトレーニングの可能性、どんな想いをもってやっているかということなんですが、メディアトレーニングをうけて、鋭くて興味深いコメントを選手が発したとします。そうするとおそらくインタビューした記者は、次回その選手を再びインタビューするときに入念な準備をして臨んでくるでしょう。すると選手はより専門性の高い面白いコメントを残すはずですよ。それがメディアを鍛える。そしてインタビューを見た人は、競技の専門性にひかれ興味を持ち、その選手に敬意を払い、日本全体のスポーツの見方が大きく変わるはずだと思います。これは競技の発展・価値向上につながるのではと思っています。メディア側にも問題があって、紋切り型の質問しかできないインタビュアーが多いんだ、という文句をもスポーツ側が言うのなら、その前にまずメディアをもっと理解して、メディアの影響力というものを知って臨むべきだと思うのです。メディア側も、取材対象であるスポーツから受けている恩恵にリスペクトを持ち、長期的なスポーツの発展を見越したような質問をし、報道をしていかなければいけないのではないかといつも考えています。その二つの橋渡しの役割をするメディアトレーニングはもっと重要になってくると考えています。以上でプレゼンテーションを終わらせていただきます。ありがとうございました。

第Ⅱ部 ディスカッション

1. 標準化から個別化へ

仲澤：大学院時代をはさんで、片上さんは、メディアとメディアトレーナーという立場でずっと現場でやられています。その現場の状況はいつも違うわけで、メディア対応は、たえず「状況対応」的な性格を持つことになります。そこで、メディアトレーニングの方法論をどのように一般化できるのかということは、とても重要なポイントだと思います。先ほど、標準化と個別化という二つのベクトルをお話しされました。メディアへの対応が苦手なアスリートを一定の適切さをもって受け応えができるようサポートすることを標準化とすれば、この部分の一般化は比較的容易かと思えます。一方、個別化のベクトルの一般化はとても難しいように思えます。

白井：お話をうかがい、メディアトレーニングという時に、中身のない選手にトレーニングしてどうなのか、ということを考えてみました。そのためには、もっと若い時から訓練しなきゃいけないなと思いました。メディアトレーニングによって選手がいろいろなインタビューに興味を持つようになる、それが選手のセカンドキャリアにつながっていくトレーニングなのではという視点ももっと早くからあってもいいのかなと。そこらへんもすごく大事な気だという気がしました。

片上：仮に中身のない選手でも、ものすごい努力をしてきたり忍耐力があったり、天才的なスキルがあるからトップに残っている訳なんですよね。それを言語化していく作業を最初集中的にします。具体的には、例えばサッカーの指導者養成のなかには言語技術教育とか、そういった論理的に物事の受け答えをできる、人を説得させることのできる論証型の発言の型が導入されていますが、それらを取り入れたりもしています。とにかく毎回トレーニングして、時には課題図書を与え、あえて知識を入れることもしています。しかし選手たちはキツキツのスケジュールの中でやっていますので、それにはクラブ側の大きな理解が必要であり、定期的・長期的にトレーニングしていけば大きな成長につながるのではと感じています。

セカンドキャリアの視点では、ナショナルトレーニングセンター（NTC）で、様々なナショナルチームに対してメディアトレーニングを施す事が多いのですが、そこでは将来まで役に立つスキルをと見越して導入してくれています。

白井：他では重視していますか？ トップアスリートのキャリアだけで出しているんじゃないかって疑問がね。もっとそれはトップの人においてもこういうようなことがきちんと出来る人を派遣しなければいけない、やっぱりもう一つハードルを高くしないと却ってよくないのではという気はしますね。トップアスリートになればこういうセカンドキャリアが用意されているんだという意識が冗長されちゃうような危惧も感じています。

片上：NTCの場合はトップアスリートのみですね。ただジュニア世代からしています。Jのクラブによっては、あとナショナルチームなどでも、高校生年代からメディアトレーニングをコミュニケーションスキルという大きな枠で捉えてトレーニングしてくださいという依頼は最近増えています。

2. 学校教育とコミュニケーション

中塚：僕は今日の話聞きながら、メディアトレーニング以前のどの部分を学校教育で担っているのかなということを考えていました。高校生たちを見ていると、ホームルームでもちゃんとした文章でよう喋らんわけですよ。出てくるのは単語だけです。単語だけ出して、すぐ多数決しようとする。何らかの提案に対して意味付けて他の

人を説得するようなことを学校の中でほとんどやってこない。たぶん小中高で何のトレーニングもしないまま、大人になってしまい、大人になってから新入社員研修かなんかでようやくやりだす…。今日はそのスポーツバーションの研修を片上さんから紹介してもらった感じがしています。小中高の学校教育の中でもっとやらかなあかんことが絶対あると思います。もうちょっと言うと、そういうトレーニングを学校教育の中でやってきている人もいると思うんです。なんにもやってこなかった人もいる。

ということで質問ですが、最初からある程度素養があるプレーヤーと、一からやらかなあかんプレーヤーの違いについて、何か気づかれていることがあれば教えてください。

片上：これは高校卒業してすぐプロの選手になったか、あと四年制大学を出てからプロになったかで大きな差が確実にあります。ただ、何がメディアにとって、ステークホルダーにとって優れたコメントなのかっていう話ですよ。前述したO選手などは感情で単語が出る選手なのですが、某JチームのY選手、あの選手はデビューして2~3試合目で初ゴールを上げたんですね。その時に「お母さんに言いたいです」って言ったコメントが大きくメディアに取り上げられたんですね。とても初々しかったんですね。まあ、「お母さん」を「母」と呼びましょとかいろいろ問題はありますが、ふっと出た、感覚でしゃべる選手っていうのはものすごくキラキラしている言葉を、生きた言葉を発します。それを型に入れてしまっているのか、という問題はありますが、インパクトを与えましたが、継続ということになると、これから選手がいろんな段階でいろんなメディアに取材を受けるようになってきて、いろんな場面で話さなきゃいけない時に、やっぱり型っていうのは必要だと思います。それは敬語の使い方も含めて。あと、四年制の大学でレポートを書いたりだとか、いろんなメディアから取材を受けている中で鍛えられる部分もあります。

もうひとつ思うのは、高校生の部活出身の選手によくあるんですが、彼らは割と恵まれた中で育ってきているんですね。リーダーシップがとれているようで、監督の指示したものを下に伝えているだけなのかなど…。実はリーダーシップを芯から発揮できる選手は少ないなと感じております。いろんな学校があると思うのですが、割といま、交通チケットの手配だとか選手のまとめだとか、リーダーの上にもう一つリーダーがいて、そこからの指示を下ろしているのかなという気がします。その点、ユース出身の選手なんかは発想が自由ですよ。

中塚：例えば生徒会とかホームルームとかやっても、だいたいもうしつらえがあつて、その上でルーティーンをこなしているだけのようなところはありますね。

片上：紋切り型で全部終わっちゃう感じですね。

中塚：そうそう。ちなみにさっきのホームルームでの話し合いってことで言うと、僕は一年生のクラスを担当しているんだけど、僕のクラスでは多数決禁止にしています。ちゃんと喋れと（笑）。

片上：そういう積み重ねだと思います。

参加者：ユースの選手っていうのは、高卒のユースの選手と、そこは明らかに違う部分はあるんですか？

片上：私は違いを感じる場合が多いです。

参加者：ユースの方が勝手気ままにやっててという部分がありますよね。

片上：勝手気ままという表現が当てはまるかどうかはわからないのですが、いい意味でサッカーの自由奔放さって

いうのを取り入れている。ユースの選手は自分のクラブ内でそのまま上に上がるわけですから、チームに馴染んでますよね。トップの選手がメディア対応するのも見えますし。ユースの選手っていうのは、意外にチームの応援番組などでメディアの経験もしてきたりしていますので、そういう部分でもう度胸が座っている部分はあるんじゃないでしょうか。あと、地方出身の選手権上がりの選手というのは、非常にメディアに大事にされています。何を言っても、「そうですね」でも「応援よろしくお願いします」でも、「力強く意気込みを語った」と書いてもらえます。それで記事になりますし、学校でも大事にされていますし、その状態でプロに入った途端に厳しさに直面する選手というのは多いんじゃないでしょうか。

嶋崎：今の話が気になって、私も高校で運動部の選手を沢山見えていますけど、現在の学校運動部のあり方っていうのが、指導者がドンといて、いわゆる先生と生徒っていう関係性がここにあるわけですね。サッカーの指導者と選手っていう関係性以上に、教師と生徒という関係性がここに存在しているわけです。ということはある程度絶対的になるわけですね。学校という組織の中では、先生の言ったことが全く相手にされなければ組織は成り立たない訳ですから。そして今度はここに3年生・2年生・1年生という学年の枠があるわけですね。3年生の言ったことは1年生にとっては絶対になってくるわけです。そうするとメディアトレーニングでいう、相手を説得するという作業がいらぬまま、言ったことはきちっと下に伝わっていった浸透していくと…。

逆のこともあって、1年生が入ってきたら、言葉遣いやなんかは上級生が教えるわけですね。「ですます」で話すようにだとか、単語で喋るなとか、きちっと挨拶をしろだとか。僕が教えるよりまず3年生が全部1年生に教えてくれちゃうわけですよ。だから形は整っていくんです。ただそれが、裏を返せば自由奔放さがなくなる、発想がなくなる。発想しなくていいわけですから。そのままやっていたら“いい子”というふうになるわけですから。さっきの森田（主将）。僕は彼のことをよく知っているんですが、彼は極めて頭が良く優秀なんですね。御所工業という工業高校の出身なんですけど、ラグビーをしなかったらたぶんこの学校には行っていないという子ですが、彼なんかは一番いい子で育ってきている。高校でもキャプテンをやって育ってきていると、たぶんああいうコメントになる。まず周囲への感謝の気持ち、相手へのリスペクト。我々はラグビーを教える以上、当然そういうことは教えています。それをきちっと受け止めて守る、そうするとああいうようなコメントが出てくる。彼は学校部活動という中で極めてエリートとして育ってきた人間であって、そうするとああいうふうになるのかなと、自分はそういう風を感じたんですけど。

片上：ありがとうございます。私ちょっと語弊がありました。高校出身よりもユースがいいと言ってるわけではなく、やはり型をはめるっていうのは、若い年代、新人選手にも言語技術教育の型を教えますし、すごく大事だということです。でも、その賜物だったんですね、森田選手というのは。

嶋崎：たぶん森田君はそういう部分が大きいんだと思います。監督の意向に沿ったコメントが述べられているというのが分かるのですが、先生はこう考えているからキャプテンはこう言う、というような関係性はそこにあるのかなと思います。

片上：逆に伺いたいのですが、あれは彼の本心ではないのですか？

嶋崎：あれは彼の本心です。そういう風に育っているわけです。そういう風に育てられているわけですね。いいとか悪いとかでなく、それが彼にとっては正しいことであるというふうに教育を受けているんですね。僕が運動部活動というものをずっと見てきて思うのは、部活動をやっていたら社会の役に立つよというのは、そうだと思うんですね。メリットもあるんですけど、裏を返せば、自由な発想という芽を、もしかしたら僕たち指導者が摘んでいるんじゃないかなという反省を日々しているところがあります。その辺は、部活動はスポーツですから、

スポーツの世界でそれでいいのかなと…。教育の世界ではいいんです。ある程度きちっとさせるというのが教育だと僕は思っていますから。スポーツには教育的側面はあるけれども、教育の場ではないので、疑問に思いながら指導をしているといったところです。

片上：ありがとうございます。

3. インタビューのタイプと主導権

小林：確認したいんですけど、インタビューの主導権はインタビューする側なんですか？ インタビューされている本人が、インタビュアーしている人が何を言っているかわからなかったら黙っていいと思うんですよね。分からなければ「その意味分かりません」でもいいと思うんです。

片上：おっしゃるとおりです。

小林：なにもこちらがサービス、芸人じゃないんですから、スポーツの選手っていうのは戦術の中で自分を表現し、誰かとコミュニケーションを取ろうというもので、マラソンのように一人でやる選手でも同じだと思うんですよ。それで立場としては、基本的にインタビューする人はうまいですし、上だと思うんですよ、でも我々も逆にインタビューする人が何か求めているなというものを求めながら仕事をしているわけです。だから選手は、胸がいっぱいであるのなら、無言でいいと思うんです。それがリアルだし、それを拾ってあげようっていうのがジャーナリズムだし、それをみんなに知らせてあげていく方法論っていうのがメディアで、メディアは方法なんです。聞かれたことがわからなかったら答えなくていいよということは教えたほうがいいと思うし、その代わりぶすっとしているんじゃないで、「すいません、言われたことが分かりません」ってちゃんと言いなさいっていうくらいのほうが、僕は自然かなって思うんです。

片上：まさしくそう指導しています。

小林：見せていただいたものに関して言えば、(インタビュアーが) 喜ぶようなコメントがベストみたいに聞こえてしまう。そうするとね、芸人に走ってしまう。僕はそれはいいとは思わない。そっちのほうが大切だし、我々取材する側はそれを求めて取材していて、それを引き出せないのはインタビュアーがタコ(笑)。

牛木：今のはみんなフラッシュインタビューなんですよ。競技が終わった後で、30秒ぐらいで、テレビ局がインタビューするわけですよ、その映像なんです。そこで黙られたらテレビは困っちゃう。だから、あれは芸人なんです。芸人であることを求められているわけです。いろんな場面のメディア対応があって、我々、記者にとってはその後に行われるミックスゾーンでどう対応してくれるかが問題です。我々聞くほうもいろいろな問題を抱えているし、答える方も周りを大勢に囲まれて聞かれるので、対応がむずかしい。先ほど一般的に大きな声で全員に聞こえるように言った方がいいと言っていました、それは囲み取材の場合ですね。気になったのは、フラッシュインタビューのことしか例に上がっていなかったことです。場合によって使い分けているのかなってことは聞きたいと思いました。

片上：貴重なご意見ありがとうございます。今日はわかりやすい部分ということでお見せしました。もちろんいろんな状況に向けて行っていますし、クラブで契約してやっているところは、毎回ホームゲームは行ってミックスゾーンで対応をチェックさせていただいています。その答えたことがどんな掘り下げられ方をして、その翌日ど

んな風にコメントが載ったかは分析をするようにしています。冒頭でご指摘がありました、質問の断り方というのは、これは非常に大事で、今日のプレゼンの冒頭で話した、選手たちはたいていメディアに対して遠慮しているんですね。なんとなくメディアの方が上なんじゃないか、メディアに聞かれたら断れないんじゃないかって思っているのですが、いやいやそうじゃない、対等なんだよと。最後に言ったように、お互いに切磋琢磨し全体を高めていくような形が理想だと思っています。メディアはすでにシナリオを描いてインタビューする場合がありますから、そのシナリオが自分の意図にそぐわなかった場合は、きちんとそれは反論したりですとか、質問の意味がわからなかったり、関係ない質問であった場合は答えなくてもいい。でもそれはノーコメントではなく、なぜ答えられないかをきちんと明確に話しましょうという指導は、危機管理の部分で徹底的にしています。ただ今日申し訳なかったのですが、今日はわかりやすい部分だけさせていただきましたが、ご指摘いただいた点への対応はこれからの課題でもあります。

4. メディア・リレーションズ

牛木：別の質問で、単純な質問なんですが、「メディアトレーニング」という言葉ですが、これはもともと英語なんですか？

仲澤：このへんのはアメリカのオリンピック委員会が世界に先駆けたプログラムを作っています。そこでは「メディアトレーニング」という言葉があります。

牛木：「メディアトレーニング」という言葉は米国で使われているわけですか？

仲澤：正確には「メディア・リレーションズ・トレーニング・プログラム」という言い方です。

片上：メディアトレーニングガイドとかガイドラインは見たことがあります。

仲澤：メディア・インタビュー・ガイドラインが正式な名称です。

片上：メディア対応のガイドラインですね。そういうのはいくつか見たことがあります。

仲澤：メディアガイドラインでは、アメリカオリンピック委員会の例が有名です。インタビューに際してアスリートが持つ権利を13条にまとめ、メディアトレーニングにおいて、それらをアスリートに伝えます。一方、メディア側にも周知し、それに準拠しない人のインタビューは受けないということになっています。そこでは、インタビューの内容を事前に知る権利、適切ところで自分の重要なテーマを挿入する権利、遮られることなく最後まで答えを言う権利などが示されています。

牛木：メディアガイドラインはいいんですが、僕が疑問に思って聞いたのは「メディアトレーニング」というから、メディアの我々の方がトレーニングを受けるのかなって…。

片上：でもきっかけはそこなんですよね。自分がインタビューする側で、最初私は筑波で社会学を学んでいたのですけど、メディア側の研究をしようと思って。ただメディアを変えるというのは要するに世論を変えるということでものすごく時間がかかる、これは選手にトレーニングを施し、選手側がゴールするようなそういうシステムが必要なんじゃないかっていう風に思いまして、メディアトレーニングという道に進んだんですが。

5. 多様化するメディアとその活用

参加者：最初に SNS 対策というのが出てきたところで、今回はインタビューってことで聞いて話すということに特化していたのですが、書くっていうところについてもトレーニングはあるのかと思って。話し言葉と書き言葉は違って、話し言葉では若干言葉遣いがめっちゃめっちゃでも気持ちで伝わったりだとかあるんですけど、それをそのまま書き言葉にすると、その言葉の拙さが目立ってしまったりだとか。うちのスタッフも全員ブログをやっているもので、話しているといいことを言うのですが、いざ文章にすると、ちょっとこれは…大人が書く文かというところがあって…。そのようなトレーニングもあるのですか？

片上：SNS 対策というのは、注意点を指導したりだとか、問題の起きた事例を見せて、発信していい or しちゃいけない、のラインを徹底するためのセミナーが多いのですが、私は facebook や twitter なんかのつぶやきのほうが思いが伝わるんじゃないかと思えますけどね。ただそこで「今日何食べた」とか、それだけが繰り返されるブログでは、やはりその選手の本当に伝えたいことが私生活なのか競技の魅力なのか、その部分っていうのは本人が気づいて考え直さなきゃいけないんじゃないかなと思います。ただそれは今、クラブが全体を把握できていない状態ですよ。プレミアリーグなんかでは SNS の部署があって逐一チェックをしています。不用意な発言だとか炎上しそうだとかをすぐにシャットアウトするような仕組みは取られています。

参加者：フロントの教育ってありますけど、フロントって非常に貧弱じゃないですか。だからそういうところまで到底たどりつかないんじゃないかな。

片上：マンパワー不足ですよ。それぞれの意識は高いんですけど手は回らない現状があると思います。あとは、マネジメント会社がどんどん出てきて、力を増してきていて、選手が活躍するとすぐに代理人だとかマネジメント会社がついたりするんですけど、そこが主導でやってしまっている場合があるので、クラブはなかなか目を行き届かせられない部分もありますよね。

例えば、サッカーの場合は、メディアトレーニングが教育プログラムの一環になってしまっているんですけど、メーカーさん、例えば NIKE に所属しているゴルファーやレッドブルに所属しているウィンタースポーツの選手を担当する場合には、彼らは明確にメーカーの伝えたいメッセージを持っているので、それに沿ったプログラムを作って施しています。必ずしも個性を埋没したりだとか、優等生的な発言をさせようだとか、こういう型にあてはめようとしているわけではなく、そこをクリアした選手はそのさらに上を目指しているという例があることをお分かりいただけたらと思います。

高橋：感想も含めてお話しします。僕自身はスポーツで子どもをどうやって人格形成していこうかということを真剣に取り組んでいます。スポーツ哲学とサッカーが主なフィールドなんですけど、その中でやはり片上さんのお話を聞いていて、結局は「大人になったもん勝ち」ということだと思うんですね。インタビューに対して大人としての対応ができる。つまり、大人っていうのは様々な利害関係をちゃんと考えたうえで発言ができる。そうすると中塚先生がおっしゃったように、そういったスキルは小学校くらいからきっちり積み上げてきたものがベースにあることが必要で、そういった選手のインタビューこそが、メディアを鍛えるようなインタビューのできる優れた選手なのではないでしょうか。残念ながら、メディアによって日本と外国では求められているものは違いますよね、きっと。インタビューにおいてインタビュアーが選手に求めてようとしているもののクオリティが日本ではすごく薄っぺらい。それは単に「キャッチー」だったりとか「涙」とか「諦めない姿勢」だとか、そういうところをとっても好んでいる。僕の専門領域であるスポーツ哲学の捉え方で言うと、自発的に「楽しさ」

を求めて参加して成り立つ「ゲーム」という場に参加する者が、自らそれを放棄して諦めるっていうことは原理的にあり得ないんです。でも日本人は「諦めない戦い」という表現がものすごい好きで、そこには日本全体におけるスポーツ理解への欧米諸国とのものすごいギャップを感じています。そういう現状の中で、片上さんのメディアトレーニングを通して選手が大人になっていって、おっしゃるようにメディアを鍛え、国民のスポーツ観を鍛えということを片上さんは意図されているんだろうな、という理解を私はしたんです。そういう意味で相当人間的なベースのところを教育してあげないとなかなかそこまでのアウトプットにならないだろうなという風には思いました。でも、是非頑張っていたきたいと思います。

片上：ありがとうございます。おっしゃるとおり、海外ではメディアの状況、また国民のスポーツ観というのはすごく違ってきます。某一般PR会社がメディアに対して意識しているキーワードは『義・理・情』なんですね。それを前面に出すとウケるだろうと。でもやっぱりそれが現状なんですよ。私もインタビュアーのとき、聞きたくなくても聞かなくていいことってやっぱりありました。バックにNHKというものがあつたりだとか日刊スポーツがあつたりするわけですよ。海外の場合、フリーアナウンサーが多かつたりだとか、監督インタビューなんか聞いていると「尋問?」というくらい突き詰めて聞きますよね。国民のスポーツの理解度の違いだとかが大きく影響しているんですが。先ほど言ったメーカーがこんなイメージにしたいだとか言った、個別化のメディアトレーニングというのをもっとやっていきたいのですが、そのためには標準化の部分というのはまず日本のスポーツ界に必要なのではないかなというのを現場で感じています。

参加者：大学院でコーチングの勉強をしていて、先ほど指導者向けにこういった講習会を開かれているとおっしゃられていたのですが、実際片上さんがインタビューとかされていく中で、例えば指導者がメディアというツールを使って選手のモチベーションを高めていく言葉掛けとか、何か印象的なものとかありますか？ コーチがインタビューされていて、これ実は選手のやる気を高めるような言葉がけなのかもというような…。

片上：それは佐々木（則夫）監督じゃないでしょうか。あの方ももとはNTTで広報されていらつしゃったんですよ。社内テレビなんかでも出ていらつしゃって。単純にアナウンススキルも高いですし、明確に言葉が伝わります。これは意外と大事で…。あとポイントとなる質問にユーモアで答えたりしますよね。あれって選手をリラックスさせたりだとか。あとユーモアというのはたくさんの人に効いていて、多くの人に考えを広めるツールとしてユーモアでかわすという術を非常に心得ていらつしゃるなといつも感じています。

参加者：逆に、コーチング現場でこういったトレーニングしたらいいよとか、選手を育てるために僕らの範囲でできることがあれば教えてください。

片上：サッカーでいらつしゃいますよね。サッカーは協会が出している年代別のガイドラインの中にも言語技術教育のエッセンスが取り入れられてますよね。あれは日頃の生活からですよ。「はい、いいえ」だけでなく、必ず理由を付けるだとか、理由づけるということは、必ず答えが具体的になります。それで言葉も増えていく。月に1回2回のトレーニングではなくて、ピッチに戻った時にやっぱり物申せるコーチ・フロントスタッフが大事なのではないかと思います。割と活躍している選手には、自由奔放にさせている場合が多いんじゃないかなというのを感じています。

中塚：レイソルのフロントに菅又さんという方はいらつしゃいましたか？ 本月初参戦の菅又くんは菅又さんの…。その立場でのコメントを…。

菅又：先ほどチームでメディアトレーニングを受けているという話で、じゃあなぜやられてないチームがあるのか、それはどういう要因があって、会社だったりクラブの運営方針だと思うんですけど、今の話を聞いている限り、メディアトレーニングは必要だと僕個人は思うんですけど、それをこれから広めていく、そしてどういうアプローチの仕方が必要になってくるのかという点で…。

片上：菅又さんは理解をしてくれました。「ああ、メディア対応っていうのは、プロの選手にとってただサッカーがうまいだけじゃなくて、それ以外の価値を身につけていかなければいけない、その一つとしてメディアスキルがあるだろう」という理解をしてくれました。多分やってないクラブ・競技というのは優先順位が低いんですね。大事だとは思ってくださっているとは思いますが。研究調査をしたことがあるんですが、日本体育協会に属している多く団体は、メディアトレーニングは必要だと答えました。ただ実施に至っていないのは、ただ単に金銭的な理由ですか、あと時間の理由で優先順位が低いんだと思います。帝京大学のラグビー部なんかは栄養面からのサポートが非常にクローズアップされましたよね。フィジカルトレーニング、メンタルトレーニング、栄養サポートというのは競技の中で欠かせないものと、優先順位が上がってきたと思うのですが、メディア対応っていうものの価値を、私は効果測定、競技力の関係性などから数字で明らかにして、目に見える形にして説得していかなければならないなと思います。錦織選手には10人で構成されるサポートチームがあって、栄養・メンタルっていうものの中にメディア対応担当という方がいますからね。日本においてはこれだけでメディアが過熱している中で、サポートが遅れている部分だなと感じています。

白井：今のところでメンタルトレーニングの話が出ましたが、メンタルトレーニングも競技力との関連性のところがありますよね。そこらへんがコーチングのところでもぶつかり合って協力できるような…そうじゃない話も時折聞くんで、そこらへんはどうですか？

片上：協力ということになると、クラブによっては例えば栄養セミナーで習ったことをじゃあ次インタビューで言えるようなそういう連携(?)…

白井：それもありますし、スタッフ同士がギクシャクしちゃっているような、大きい組織ではそういう話聞きますけど。そこら辺は感じることはありませんか？（メディアトレーニングが）メンタルトレーニングと重なる部分ありますよね。実際のテクニカルなコーチングも重なっていますし、独立した部分ってないじゃないですか。ところがそこらへんが、陣取り合戦じゃないですけど、あるということを時折聞きます。

片上：私が雇われる時に、どこが主導権を握っているかという問題だと思うんですよね。以前は最初PRの立場からアプローチしたので、広報部との契約が多かったんです、ですが次第に、継続して行なっているところでは、強化部がメディアトレーニングが必要だと雇ってくれています。そうなる割とうまくいきますね。やはり競技団体っていうのは競技力の向上が第一にあるものですから、その理解というのは必要だと思います。

依藤：単純にメディアトレーナーというのを仕事としている人たちは何人くらいいらっしゃるのでしょうか？

仲澤：片上さんには厳しい質問ですね。いま、自称メディアトレーナーが多くなっていますので…。そのなかで「本物」は何人ですか？（笑）

片上：ナショナルトレーニングセンターなんかでも、元アスリートの方が自分のメディア経験を語る、これをメディアトレーニングと呼んでいることも多いと思います。これ、Jリーグなんかでもそうですね。元アスリートの

方呼んで、Jリーグの作ったマニュアルに沿って模擬インタビューすることもメディアトレーニングと呼んでいます。あと、元アナウンサーの方などがマナー教室の一環として入れていることもあるんですが、私が申し上げたかった、正しいメディアトレーニングの目的というものをもったプログラムというのを行なっているのは少ないんじゃないでしょうか。もともとメディアトレーナーというのは、PR会社が、政治家さんだったりやるものですから、これはたくさんいらっしゃるんですね。そういう方がスポーツでマネジメント会社から頼まれて講義する場合もあると思うんですが、スポーツ専任にやっている方は少ないと思います。

仲澤：ありがとうございました。片上さんからは貴重な情報提供と質疑における示唆をいただきました。また、ご参加いただいた皆様には、多くのコメントやヒントをいただきました。やり取りはつきないところですが、そろそろ定刻となりましたので、ここで一度、閉めさせていただきます。片上さん、本日はどうもありがとうございました。

(一同、拍手)